

# 病と健康をめぐる

## 中野重行 ニンゲン学

ボランティアとは、形容詞で「自発的な」、名詞では「志願者」という意味です。日本では「人のために働く」という意味で使われることが多く、2011年の東日本大震災では、被災地のボランティア活動が注目されました。

他人のためを思ってボランティア活動をしたはずなのに「癒やされたのは自分の方です」という声を耳にすることがあります。他人



のために働くことは、実は自分のためでもあるのです。それが人間なのだと思います。医療現場でも新しい薬ができる段階で多くのボランティアが必要になります。

新薬ができるまでには、

## 創薬・育薬ボランティア

### より豊かな医療つくる

をしたりする臨床研究コーディネーター（CRC）がいます。9月に神戸市であったCRCの全国大会では、腎臓がんを克服した元プロレスラーの小橋健太さんが講演しました。小橋さんは「『治験』という言葉は一般の人には分かりにくいので、『ボランティア』という言葉が良いのではないかと指摘されました。

薬は市販後にも、使い方に関する臨床試験や臨床研究を行うことで改良を重ねます。この段階を「育薬」と呼びます。薬そのものが育つわけではないですが、薬の実力を評価し、より適切な使い方を研究する段階です。有効かつ安全な使い方に関する情報を増やすイメージが、育てる感じに近いことから育薬と名づけました。大分から生まれた育薬という言葉は、今では全

さまざまな化学物質を合成

して薬を作る段階から、実際に患者に投与して薬の有効性と安全性を確認する「治験」という臨床試験のプロセスが必要です。その後、厚生労働省から承認されること、薬として一般に使用できるようになります。ここまでの段階を「創薬」といいます。

治験を計画通り行えるように医療関係者と調整したり、患者のケアやサポート

を調整して国際的に整合性が取れるようにする法整備

に協力するため、厚生省(当時)の研究班で主任研究者を務めました。その際、「治験」に参加する被験者を一般の人に分かりやすいように「創薬ボランティア」と名付けるように提案し、NHKの番組に出演して解説をしたことがあります。「創薬ボランティア」の存在があつてはじめて、新しくより良い薬ができます。

国で使われています。

育薬の段階では「育薬ボランティア」の協力が必要になります。ボランティア活動を大切にするには、生きる意味、生きがいにもつながってきます。より豊かな医療をつくっていくために必要な創薬と育薬にとても、ボランティアはなくてはならないものです。(大分大学名誉教授・元同大学病院長)

＝ 随時掲載 ＝